

はじめに

今回、「身の回りにある地方自治」というテーマによって各報告者たちは自分の地元を振り返り、地方自治について考えた。そしてここに集稿された 6 本の原稿はマクロな視点とミクロな視点によって成り立つ。そのため、今回は 2 部に分けて記事を紹介しようと思う。

まずマクロな視点とした第 1 部についてである。観光という商業が地方自治に対する位置づけは各自治体において低くはない。そんな観光に焦点を当てて書かれた論文が第 1 部である。はじめに「観光市を目指す日光市の姿」では、日光における現状が分析され、問題が明確にされる。そしてその問題を報告者は交通事業の発達、メディアにおけるアピール方法の改善そして現地における情報量の増加と 3 点にわけて論じている。次に「宇都宮市と曲阜市における観光資源について—餃子と三孔を中心に」では、宇都宮餃子と報告者の出身である中国山東省曲阜市の三孔の 2 つをどのように観光資源開発を行っていくかが論じられている。2 つの資源はそれぞれ食と観光であり、違った資源であっても共通に開発が考えられるといった点に着目されている。3 つ目として「米沢市の地域への取り組み」である。この論文では地域振興を行う上で重要なものは何であるかについて考察されている。例として米沢市を取り上げ、米沢市にはなぜ定住者が少ないのかといったことが論じられている。

第 2 部はそれぞれの地域が地元住民に対してどのように定住させる魅力を育成できるかを具体的な事例を取り上げて、考察しているものを集めた。1 つ目は「いわき市の『見せる』安全性」である。この論文では 2011 年の東日本大震災でもたらされた原発の風評被害に対する福島県いわき市役所の見せる課を取り上げている。この見せる課では地元のみならず、全国的にいわき市の安全性を伝えるべく活動している。福島の実状をこの見せる課がどのように働きかけているのかを考察している。2 つ目は「下妻市の医療サービスの取り組み—子宮頸がん検診を例に一」である。この論文では地方自治が行う医療サービスに焦点をあて、自治体がもたらすサービスによって、実際の健康維持以外にもたらす影響を考察した。この論文では副題の子宮頸がん検診を実際に報告者が受診しており、あるいみでは体験報告書という一面も持っている。最後に 3 つ目の「北海道におけるアイヌ民族教育」は、北海道のアイヌ文化教育を取り上げている。ここでの自治体は、市役所などではなく、北海道の教育委員会また教職者の育成機関などに注目している。北海道ではアイヌ文化に対する教育がなされている。しかし、その教育水準は地方ごとに異なる。その背景には教職者たちの指導方法の不明瞭さ、資料不足、またアイヌ民族の人口の低下などがあると述べられている。文化教育をするとき、各自治体ではどのような役割が果たされるべきなのか報告者なりの意見がまとめられている。

以上 2 部構成として、論文の概要を説明してきた。それでは各論文が身の回りからどのような視点を論じているかを見ていきたい。